

この世の終わりの家

大村伸一

この世の終わりの家の窓は
夜に向かって開かれていて
風はすこしもないのだけれど
いつも満月が浮かんでいる

月の光をひとすくい
銀のスプーンで口の中
すべてを食べたら
君も満月になるのだろうか

この世の終わりの家の窓は
夜の真ん中に開かれていて
星はひとつもないのだけれど
いつも満月が静かにゆれる

月の光を指ではじいて
夜空に音が響いてく
地平線まで届いたら
君は闇夜になるのだろうか

この世の終わりの家の窓は
夜の裏側で閉じられていて
鍵は誰かが隠してる
空に満月が漂っていても
空に星が輝いていても
窓からはなにも見えはしない
月の光は届かない

その一 さかなの恋

この世の終わりの家に、たった一人で住んでいました。窓の外はいつも真夜中で、夜空の真ん中にはいつも満月が浮かんで揺れています。この世の終わりの家の中から、ぼくは夜をながめていました。

この世の終わりの家の瓦は、満月の光を反射して、いつも銀色に輝いています。光を反射するときのしゃんしゃんというかすかな音は、夜空の隅まで届いていました。

この世の終わりの家の瓦を、運命の恋人だと信じて、一匹の白くて細長いさかなが空を、泳ぎました。瓦に寄り添い魚は漂い、月の光で銀色にかかります。

はしごを屋根にたてかけて、ぼくは瓦に上ります。さかなはなんだかうらやましように、ぼくのことを見えています。僕はやさしくさかなに触り、しずかに背中にまたがります。

さかなの透明なうろこは光を吸って、きらめくヒレが光をこぼします。するとさかなは夜空をもっと高くへゆっくり昇ります。さかなは瓦の恋人と、別れることがつらそうに、きゅるるきゅるると泣いています。

さかなは満月に届くまでのぼるでしょう。ぼくはさかなを抱きしめて何度もごめんねとささやきました。さかなは許してくれないけれどぼくはごめんねとささやきました。

満月の縁にふれるとき、さかなは溶けて光にかわり、夜空をすこしあかるくします。僕はくるくるまわって落ちて、この世の終わりの家に帰ります。屋根の瓦はすこしさびしそうです。

この世の終わりの家に、たった一人で住んでいました。窓の外はいつも真夜中で、夜空の真ん中にはいつも満月が浮かんで揺れています。満月の縁でなにかが光ると僕はさかなのことを思い出します。

この世の終わりの家の中から、ぼくは夜をながめていました。

その二 つめたいさかな

この世の終わりの家に住んでいたのは冷たい体のさかなでした。

さわってみてもいいですかと尋ねると、不躰だねといいながら、すこし考えたあとで許してくれました。左手の人差し指で、体の横のエラの少し上のところに触りました。

堅いうろこは冷たくて、触ったとたん、指は凍ってしまったのです。凍った指はさかなの体にくっついてしまいました。

君の指はやけどしそうだ。はやく指をどけなさい。

そう言われても指は離れないのです。ひっぱってみても、息をふきかけてみても、凍った指ははがれもしなければ、とけることもありません。

困りました

そういうと、さかなも答えます。

困ったものだ

この世の終わりの家に住んでいたのは大きなさかなでした。

僕は指がくっついたまま、この世の終わりの家に住んでいます。まるで従者のように、さかなの行くところにはついていかなくてはなりません。とはいっても、さかなはそんなには動きまわりはしないのです。きっと、ぼくのことを気にかけてくれているのでしょう。

ずいぶんたってから、さかなが僕に尋ねました。

わたしのうろこを剥がしてしまえば、すぐに自由になれるだろうに、どうしてそうはしなかったのかね。

ずいぶんたってから、ぼくはさかंनाに答えました。

ぼくの指を切り落としたら、あなたは自由に動けるでしょうに、どうしてそうは命じなかったのですか。

それから、ずっと長い間、さかंनाとぼくは一緒に暮らしました。ぼくはどんどん冷たくなり、さかंनाはどんどんあたたかくなっていきます。いつかさかंनाとぼくの体温が同じになる時、さかंनाもぼくももう動けなくなるのだろうと思っていました。

そのことを話すと、さかंनाはこういいます。

それもこれもいたしかたのないことだ。

ぼくはこうこたえます。

それもこれもいたしかたのないことですね。

この世の終わりの家の窓から見えるのはいつも真夜中の夜空です。夜空の中心から、この家の中をのぞきこんでいる満月はすべてを知っていて、ぼくをなんだかぼかにしているのですが、さかंनाと僕の体温が等しくなり、さかंनाと僕がもう目覚めないねむりにつくとき、少しだけ子守歌を歌ってくれていたような気がします。

その三 木の東側

この世の終わりの家に住んでいたのは名前も分からない木でした。

木は部屋の真ん中にまっすぐに立っていました。梢は天井にそっと触って、それ以上、体を伸ばせないことに気づくと少し木の葉をふるわせてから、ゆっくりと太陽を探していました。

この世の終わりの家の窓からは、真夜中の夜空しか見えません。夜空の真ん中で輝いている

満月がすこし強く光ってみせたりもしたのですが、木は、太陽でなければだめなんだと、ぼくに話しました。

とても真剣な様子だったので、ぼくは太陽をさがして家を出ることにしました。木がさびしくないように、窓の鍵をはずし、夜空にむけて開けてから、ぼくは出かけました。いつもと変わらない真夜中のことです。

この世の終わりの家からは、まっすぐ東に道が延びていました。道は砂漠に続いていて、砂漠にはいかにも太陽がありそうです。ぼくはその道を歩いてゆきました。本当のところ、他には道はなかったのです。

道は満月に照らされて銀色です。一步一步進むたびに、道の銀色がぼくの靴にうつり、ぼくの足音は銀の鈴の音のように夜空の端まで響きます。ぼくはその音が行進曲に聞こえるように、リズムをとりながら歩いてゆきました。

いつのまにか道はなくなり、ぼくは砂漠を歩いていました。砂漠の砂は満月に照らされて銀色です。風に舞い上がる銀色の砂を額や手のひらや足首に受けて、ぼくの体は銀色になってしまいそうです。もしも全身が銀色になれば、ぼくも満月になれるでしょうか。ぼくも夜空を漂うのでしょうか。

そんなことを考えているうちに、ぼくは迷子になってしまいました。

砂漠の空も真夜中です。中心に満月が浮かんでいます。ときどき月は、右とか左とか指図するのですが、どうもぼくをからかっているだけのようです。言われたとおりに歩いても、ぼくはどこにもたどり着けないのです。

真夜中でも地平線はかすかに見えます。満月の光はかろうじて地平線に届いているようです。地平線を幾つも越えて僕は歩き続けました。

砂漠の夜空にもさかなはいました。紫色の大きなさかなが、ぼくをみつけて寄ってきます。

「こんなところでなにをしているの」

というようなことをさかなは僕に尋ねました。

「太陽をさがしているのです」

そう答えると、さかなは含み笑いをして、あっちにあるよと、口から泡をひとつ吐き出して、それについてゆくように言いました。

すこし疑いながら、ぼくは言われたように、さかなの泡についてゆきました。

満月の光をうけて、泡はすこしずつ大きくなってゆきました。このまま大きくなっていったら、夜空も満月も全部、泡の中に飲み込まれてしまうのかなと、ぼくはぼんやり考えていました。

そんな心配はする必要などなかったのです。幾つ目かの地平線を越えて、大きくなりすぎた泡が地面に触れた瞬間、泡ははじけて消えてしまったからです。

それでもさかなは嘘をついていたわけではなかったようです。泡のはじけた跡に、ボール紙で作った小さなお墓がありました。そこにはこう書いてあったのです。

「太陽のお墓」

へたくそな文字でした。

ぼくは来たときと同じ道をたどりながら、この世の終わりの家に戻りました。迷っていたとばかり思っていたのに、ぼくのたどった道は太陽の墓への一番の近道だったのです。紫色のさかなにも遭わず、満月にからかわれることもなく、ぼくは家にたどり着きました。

「太陽はもう死んでいたよ」

そう告げると、木はそんなことはたいしたことじゃないよとでも言うように、元気そうに木の葉をゆらし、窓の外をじっとみつめつづけるのです。

その四 木の西側

この世の終わりの家に住んでいたのは名前も分からない木でした。

木は部屋の真ん中でまっすぐに立っていました。幹も葉も根も真っ赤なその木は、じっと見ているとやがてそれが木なのか火なのか分からなくなってしまいます。木も自分が木なのか火なのか分からなくなってしまっているのでしょう。幹も葉も根もただ赤いだけでなく熱を持っていて長くは触ってられないのです。

赤い根は床をそっとなでながら、それ以上地下にもぐることができないことに気づいても、根の先端を伸ばして部屋の隅々まで水を探し続けていました。

この世の終わりの家の窓からは、真夜中の夜空しか見えません。夜空の真ん中で輝いている満月がすこし雨をこぼしてみたのですが、赤い木は、こんなに苦い雨ではなくて真水でなければだめなんだと、ぼくに話しました。

とても真剣な様子だったので、ぼくは真水をさがして家を出ることにしました。木がさびしくないように、窓の鍵をはずし、夜空にむけて開けてから、ぼくは出かけました。いつもと変わらない真夜中のことです。

この世の終わりの家からは、まっすぐ西に道が伸びていました。道はその先で森に続いていて、森にはいかにも真水がありそうです。ぼくはその道を歩いて行きました。本当のところ、他には道はなかったのです。

道は満月に照らされて銀色です。一步一步進むたびに、道の銀色がぼくの靴にうつり、ぼくの足跡はカモシカの銀色の足跡のように輝いて、道の終わりまで続きます。ぼくはその足跡がタンゴのステップになるように踊りながら歩いてゆきました。

森は満月に照らされて銀色です。一步一步進むたびに、銀色に輝く木の葉が落ちて帽子に止まり、ぼくの頭は小さな満月のように光りはじめました。森と同じに輝いていれば、まぶしい森の中でぼくの姿は誰にも見えなくなっているでしょう。森の中で誰にも会うことがなかったのは、みんなこうして姿を隠しているからでしょうか。

道は森の中をぐねぐねと曲がりながら続いていましたが、曲がり角の向こう側はいつもたく

さんの木の葉が隠っていて見えませんでした。

木陰から誰かが呼んでいました。紫色の大きなさかなが、木の高いところで枝にひっかかって逃げられなくなっているのです。うろこに鋭い木の枝の先端が突き刺さっているのが見えます。

「どうしてここに来たのですか」

とぼくが尋ねると

「ここでパーティがあると聞いてね」

というような意味のことを、さかなは答えました。

パーティがあるにしては、木の葉はすこしも落ちていませんでした。パーティがあるにしては、鳥のはしゃいだ声もしませんでした。さかなはぼくを試していたのかもしれませんが。ぼくはそれに少しも気づかずに道を先へと急ぎました。

道は幾つ曲がったのでしょうか。満月は右へゆけ左へむかえと指図しますが、分かれ道などないのです。それでも森の終わりが近づいてきた頃、道ばたに透明なポストがありました。

ポストの前で、ぼくは靴底のボール紙を取り出し、小さく折って手紙を書きます。

「真水のありかを教えてください」

友達の名前はひとつも思い出せなかったので、宛名は書かずにポストに入れました。

それからぼくはポストの下で眠り、返事が来るのを待っていました。森の道は暗くなったり明るくなったり、満月の気分次第です。

透明なポストの中のぼくの書いた手紙は、眠っている間になくなり、また、ねむっている間に、返事が届いているのです。郵便配達は、眠っている間だけ働いているのでしょう。

返事は、紫色のうろこの内側に、銀色のインクで書かれていました。

「真水のことには気に入らない。少しも泡ができなくなるから。海の底には真水はないよ。昨日の家に行ってください」

言葉をひとつ読むたびに、手紙から海のなまぐさいにおいがしました。きっと、誰かのいたずらなのだと思います。

それでも、昨日の家は森のはずれにありました。家に近づくと看板に「銀色禁止」と書いてあります。ぼくは全身の銀色をはらい落として昨日の家近づきました。

昨日の家の前に立っていたのは恋人同士のうさぎでした。ぼくが近づいても、抱き合っけキスをするのに夢中です。

「こんにちは」

と声をかけて、ぼくは家に入りました。しっぽがぴくりとしただけで、うさぎはキスを続けたままです。

昨日の家に住んでいるのは大きなたまごでした。

部屋の真ん中にあるゆりかごの中で、たまごはぼくを待っていました。指で触るとぐねぐねしていて、中から押し返してくるのです。

「真水のありかを知っていますか」

ぼくが尋ねてもたまごは何も答えません。

昨日の家の窓からは、真夜中の夜空しか見えません。夜空の真ん中には満月がいつも輝いてゆれています。

満月の光は銀色ですが、窓を通ると紫色になり、部屋の中のものすべてを紫色にかえてしまいます。少しずつぼくも紫色にかわってゆきます。なんだか真水を探していることも忘れてしまいそうです。

あわてて昨日の家を出ると、恋人同士のうさぎはぼくに初めて気づいたようなふりをして、キスをやめ

「どうしてここにいるのですか」

「どうしてここにいるのですか」

と、声をそろえて尋ねました。ぼくは

「真水を探しているのです」

と答えたのですが、うさぎは少しも信じていないようです。そもそも「真水」の意味が分からなかったのかもしれませんが。

それから森の入り口に戻りました。振り返ると、昨日の家の入り口で、うさぎたちは地面に落ちた紫色のかけらを拾い集めています。そして、屋根の上には、何か紫色のかたまりが浮かんでいたのです。ぼくは、それが何なのか確かめもせず、森の中に入りました。

森の中の道はいつも一本道だったのに、ぼくは森で迷ってしまいました。梢の間からときどき顔をだす満月が、右へゆけ左へむかえと指図するのですが、分かれ道などないのです。ぼくはただ歩き続けるだけです。

銀色の森はまぶしくて、知らない間にぼくは目が見えなくなっていました。道だとばかり思っていたのは、本当は目の中に残された道の残像だったのです。

目の中の銀色の森はどこまで歩いても果てがなく、この世のすべてが森になってしまったようでした。梢の間からときどき見える夜空さえ銀色に光り、満月がどこにいるのかもわからなくなっていました。

突然、声が聞こえました。

「走ってはだめだよ。歩きつづけなさい」

声が耳のすぐ横で聞こえたので、ぼくは怖くなって走り出してしまいます。

三歩駆けたとき、ぼくは水の中に落ちました。水しぶきをあげて落ちたから、靴もズボンも水浸しです。服も帽子も水浸しです。

水はちょうどぼくの胸のあたりまでありました。目の見えないぼくにはそれだけしかわかりません。

ぼくは指についた水をすこしだけ嘗めてみます。それは甘い水銀でした。

水銀が喉をとおり、ぼくの体にしみこんでいくと、目の中にひろがる銀色が少しずつ崩れて夜の闇の色に変わっていくのです。そして、夜空は真っ暗な闇に戻り、残ったのは銀色の満月だけでした。

目の見えるようになったぼくは、水銀の湖に落ちていました。

湖の向こう側から紫色の大きなさかなが空中を泳いで来るのが見えました。ぼくの目の前で静止すると、さかなはぼくを見下ろしながら言いました。

「こんなところで何をしているの」

ぼくは岸にあがると、耳を下に向け、片足でとんとんジャンプして、耳の中の水銀を抜いてから答えました。

「真水をさがしているのです」

待ちくたびれた紫色のさかなは、なげやりに言います。

「真水など、もうとつくになくなってしまったよ。さがすだけ無駄というものだ。この泡でがまんするんだね」

そういうと紫色のさかなは口から大きな泡を吐きだしてぼくにくれました。

泡は水銀でできていて、ぜんぜん真水とは違います。それでも、ぼくは仕方なくそれを手のひ

らに載せ、この世の終わりの家に帰ることにしたのです。

ぼくは来たときと同じ道をたどりながら、この世の終わりの家に戻りました。迷っていたとばかり思っていたのに、ぼくのたどった道は水銀の湖への一番の近道だったのです。恋人同士のうさぎに疑われることもなく、透明なポストにつまづくこともなく、ぼくは家への道を戻りました。

手の中の水銀の泡は、ぼくが一步進むごとに少しずつ小さくなってゆきました。この世の終わりの家にたどりつく頃には、泡はすっかりなくなって、ぼくの手の手ひらには真っ赤な焼けどだけが残っていました。

この世の終わりの家には、あの赤い木はもういませんでした。窓は開いたままです。床には土のかたまりさえ残っていません。真夜中の夜空に浮かぶ満月は、事情を知っているはずですが、何も教えてくれようとはしませんでした。

ぼくは焼けどをした自分の両方の手首を植木鉢に植えて窓辺に飾っておきました。満月の光をあびて揺れるぼくの手の手ひらは、まるであの木がちいさくなって戻ってきたようです。植木鉢の中から窓の外をじっとみつめつづけています。

その五 最後の天使

この世の終わりの家にたった一人で住んでいたのは、ほとんど最後の天使でした。

この世の終わりの家の窓から見えるのは、真夜中の夜空だけです。夜空の真ん中にはいつも満月がいて、風に揺れながら輝いています。

窓辺の椅子に腰掛けて、天使はその満月をみつめています。ときどき、手にしたカップを口にはこび、甘いシロップを一口飲みます。口の中で味わってから、ごくりと飲み込むとき、口の端から少しだけシロップがこぼれます。天使の足下の床には、シロップの結晶でできたオルゴールが幾つも落ちています。オルゴールは蓋を開くと踊り子がバレエを踊りながら回転します。なめるととても甘い踊り子です。

夜空を見ているときの天使は黒豹の毛皮のようなにおいです。首の後の黒くて硬い毛を手のひらでなでると、天使は大きなため息をついて、黒豹の鳴き声を真似てくれます。そんなには似てはいませんが、上手だねとぼくはお世辞を言います。天使はそれですこし満足するのか、黒豹のにおいはすこし薄れます。

天使にいくら頼んでも、背中の中は羽根を見せてくれません。

ひとに見せるとそのとたん、羽根はとけてなくなってしまうのだと言い訳をして、またシロップを一口なめるのです。もしかすると天使は、嘘をつくためにシロップを飲んでいるのかもしれない。

本物の天使はとてもめずらしいので、きっとこれが最後の天使です。天使には通し番号がつけられていますが、どこに番号が刻まれているのかは、本人ですら分かりません。それさえ分かればこの天使が本当に最後の天使なのかどうかはつきりするのでしょうかけれど、天使は数字が嫌いです。

「オルゴールの踊り子は三拍子のワルツで踊っている」

というだけで、天使は眉をひそめるのですから。

天使はときどき窓から空に飛び立ち、世界をまわって帰ってきます。するとまだ羽根はあるのでしょうか。見えても羽根があるようには見えないのです。そのかわりとでもいうように、帰ってくるたびにトランクいっぱいのおみやげをくれます。トランクの鍵はくれないので、トランクの中のおみやげが何なのか、まだ見たことはありません。

天使が家にいない間は、満月の光に照らされて、真夜中の空が隅々まで真っ黒なのだということが分かります。もしも満月がいなければ、夜空が何色なのかずっと迷っていたことでしょう。それでも天使が戻ってくると、誰も夜空の色のことなど考えようともしなくなります。

ボール紙の切れ端に書いた手紙が届きました。

「ぼくの恋人を知りませんか」

へたくそな文字です。

差出人も宛先もとても読めたものではありません。もしかすると、もともと書いてなどなかったのかもしれないくらいです。

ボール紙の切れ端を閉じて天使に渡すと、天使はあわてて手紙を隠し、ぼくと視線をあわせないようにして、なんだかすこし小さくなったようです。だからぼくは、手紙を読んでしまったことをずっと言い出せませんでした。でも天使は全部知っていたのでしょう。それからずっと、ぼくに話しかけることはありませんでした。

確かなことは、天使はぼくの知らないところで返事を書いていたということです。満月を見ながら真夜中を過ごす天使の指先に銀色の鱗粉がついていて、目の下のうろこが一枚剥がれていた日は、必ず天使は手紙を書いていたのです。手紙を書くたびに天使はすこし縮んでしまいます。隠すことなどできません。

でも、ボール紙の切れ端に書かれた手紙はもう二度と届きませんでした。ぼくが読んでしまっただけからは、もう誰も天使に手紙が届くなどと信じなくなったのです。それとも、手紙だとばかり思っていたのは、あれは手紙ではなくて、ボール紙で作った天使の羽根だったのかもしれないかもしれません。だとすれば、手紙の言葉だと思っていたのは、あれは天使の番号だったのでしょうか。

この世の終わりの家の窓には、もう天使はいません。どんどん小さくなった天使は、夜空の闇にとけるように音もたてずに消えてしまいました。

その六 はじまりのピエロ

この世の終わりの家に、はじめから住んでいたのはピエロでした。

この世の終わりの家の窓から見えるのは、真夜中の夜空だけです。夜空の真ん中にはいつも満月がいて、風に揺れながら輝いています。

ぼくがこの世の終わりの家にたどり着いたとき、窓辺の椅子に腰掛けて、ピエロは満月をみつめていました。椅子を一本足で立たせたり、その椅子の上で逆立ちをしてみたり、ピエロはすこしも落ち着きません。

「ここがこの世の終わりの家ですか」

そう尋ねても、ピエロは何も答えずに、逆立ちをしながらワインを飲んでいました。ワインのラベルに書いてある「この世の終わりの家」という逆さまの文字を見て、ぼくはようやく目的地に着いたことを知ったのです。

部屋の中にピアノがあるときは、ピエロはペンキをかきまぜてピアノを全部ピンクに塗ります。ピンクのほうが暖かい音になるともっともらしく言うのですが、黒鍵も白鍵もピンクでは音の違いなど分からなくなってしまいます。

すべての鍵盤を同時に叩きながら、ピエロは四つの目をみひらいて満月の様子をうかがいます。満月が笑うとピエロはすこし幸せになるのです。二つの口の口許が同時にひくりと笑います。

窓辺にピッコロがあるときは、ピエロは窓に近づかないように部屋の反対側の隅で膝を抱えてじっとピッコロをみつめています。縦に吹いたり横に吹いたり最後は吹かずに振り回したりして聞いたこともないメロディをかなでる自分の姿を想像しながら、ピエロはピッコロをみつめています。

ピエロの顔は白とオレンジのチェス盤模様に塗られていて、いくつかの升は黒く塗りつぶされています。

「それを見たらみんな怯えてしまうよ」

とぼくは言うのですが、ピエロはそれがおもしろい顔だと信じているのです。

腰から垂れ下がったボロ切れをひきずって、ピエロは部屋の中を歩き回ります。ボロ切れは床にこすれると、何かが泣いているような声をあげます。服やズボンもずいぶん破れてい

て、首や胸や腕や腰の紫色のうろこがキラキラ反射しているのが分かります。

楽器が部屋にないときは、リンゴやオレンジをカゴに詰め込んで、重さでよろめきながらピクニックにでかけます。でも窓辺の植木鉢や、入り口の横に積み上げられた鍵のみつからないトランクの山は、連れてゆくわけにはいきません。気づかれないように、そっと家から外に出ます。ぼくはその後についてゆきます。

この世の終わりの家からは、まっすぐ北に道が伸びていました。北に向かう道を歩いてゆけばその先は、ピクニックにおあつらえむきの、芝生や噴水のある大きな公園です。ピエロは、リンゴやオレンジでいっぱいのカゴをかかえて、ポロ切れのしっぽをひきすりながら、僕の手をひっぱって公園にむかいます。

この世の終わりの家の北側一帯はさえぎるものがなにもなくて、地平線まで道の続いているのが見えました。それでも見える限りの地平線まで公園はありません。地平線の向こうにはまた地平線があり、そのまた向こうにも地平線はあるのですが、いくつ地平線を越えても、公園は見えないのです。

「確かにここだったのかな」

ぼくが尋ねてもピエロは何も言わずにただ歩き続けるだけです。どうも道に迷ってしまったようです。夜空の真ん中で満月は、右にまがれ左にすすめと指図しますが、道はずっと一本道で、分かれ道などないのです。ピエロとぼくはただその道を歩いてゆきました。

カゴの中でリンゴはひとつひとつ腐ってゆきます。カゴの中でオレンジはひとつひとつ縮んでゆきました。しっぽのポロ切れは地面にこすれて燃えてしまい、もう焦げ跡しか残っていません。ピエロの顔は汗が化粧と混じりあい、今では緑とピンクのチェス盤模様になりました。いくつかの升は相変わらず黒く塗りつぶされています。

「それを見たらみんな怯えてしまうよ」

とぼくは言うのですが、ピエロはそれがおもしろい顔だと信じているのです。

それでも公園にはたどりつきました。公園に着くときはいつも真夜中です。空の中心には大

きな満月が漂っています。

夜空を見ているときのピエロはうさぎの毛皮のようなにおいです。頭の上で折れ曲がっている白くて柔らかい右耳を指でなでると、ピエロは大きなため息をついて、恋人同士のうさぎがキスをするときの鳴き声を真似てくれます。そんなには似てはいませんが、上手だねとぼくはお世辞を言います。ピエロはそれで満足するのか、うさぎのにおいはすこし薄れます。

ピエロにいくら頼んでも、綱渡りをしてみせてはくれませんでした。公園の空中には綱渡りのためのロープが縦横にはりめぐらされていて、綱渡りをしないほうが難しいというのに、ピエロは綱渡りだけは見せてくれませんでした。ひとに見せるとそのとたん、世界中のロープが消えてなくなってしまうのだと言い訳をして、ピエロは空中のロープにほおずりをします。ロープのことをとても愛していたのかもしれませんが。

そのかわりとでも言うように、ピエロはカゴから腐ったリンゴを取り出し、空中に投げあげます。その次は縮んだオレンジも投げ上げます。高く高く投げられたリンゴとオレンジは一直線に並んで、一番上は満月のすぐそばにまで届きました。それからピエロはとびあがり、オレンジを駆け上り、リンゴをひとつひとつよじのぼります。最後のリンゴから満月に跳び移るときには、満月の光をうけてピエロの背中の大きなうろこが、水色に輝いたように見えました。

それからぼくは公園で、ピエロが帰ってくるのをずっと待っていたのですが、ピエロは帰ってきませんでした。真夜中にずっと続く満月のきらめきは弱くなったり強くなったり、いつも満月の気分次第です。そのきらめきの中心からボール紙の切れ端がひらひらと落ちてきたとき、ぼくにはそれがピエロの手紙だということがすぐに分かりました。でも手にとるとそれはボール紙ではなく、銀色のおおきなうろこに、ピンクのインクで書かれた手紙だったのです。

「夜はいつまでもこのままです」

へたくそな文字です。

差出人も宛先もとても読めたものではありません。もともと書いてあるはずもないのです。そんな分かりきったことを知らせてくるのはピエロしかいないのですから。

それからぼくは一人きりで、来たときと同じ道をたどりながら、この世の終わりの家に戻りました。迷っていたとばかり思っていたのに、その道は公園に続く一番の近道だったのです。戻る道の途中には重いカゴもなく、満月の指図もうけず、すぐにこの世の終わりの家にたどりつきました。

この世の終わりの家で過ごすたった一人の生活はとても静かで、椅子に座り窓の外の真夜中の満月をずっとながめているだけです。満月の光が揺れるたび、空からおちてきた手紙を取り出して読み返します。うろこはいつのまにか大きな羽根になっていました。偽物かどうかを確かめるために、羽根の根元を噛んでみると、甘いシロップがあふれだしてきて、確かに本物の羽根なのです。すこしうさぎの白い毛の味もしました。

永遠に続く真夜中に退屈した満月は、ときどき、夜空の中心から地平線の裏側まで虹色の糸を伸ばします。その糸の上を透明な羽根を持ち、ボロ切れのようなしっぽを垂らした誰かが一輪車に乗り、長い棒でバランスをとりながら綱渡りを試みさせてくれます。糸はとても高いので、頭がオレンジ色とピンクのチェス盤模様になっているのかどうかは分かりません。ときどき、満月がきらめいて銀色の光が棒に当たると今にも落ちそうになるのですが、一度も落ちたりはしませんでした。

永遠に続く真夜中に退屈したぼくは、この世の終わりの家の窓から、その綱渡りを何度も見たのですが、ぼくの手の中のロープは一度も消えませんでした。とすると、あの空で綱渡りをしているのはピエロではないのでしょうか。だいいち、ピエロには羽根などなかったはずですから。

あれは、この世の終わりにいたはじめてのピエロだったのだと思います。ピエロが残した、入り口の横に積み上げられた鍵のみつからないトランクは偶然開いて、その中にどこかよその国で作られたオルゴールがぎっしり詰まっていたということ、誰かピエロに伝えてください。

その七-∞ セールスマン

セールスマンは大きな鞆と鳥かごを持ち、この世の終わりの家を訪れました。ずいぶん昔のことです。

セールスマンは夜の闇で仕立てたように黒いコートを着て、満月の光の中にも、また別の夜がそこにあるようでした。

そのころも、この世の終わりの家の窓の外は真夜中でした。夜空の中心にはいつも満月が浮かんでいて、夜の闇をさらに暗く隠しているのです。

どこか遠いところから来たというそのセールスマンは、このあたりはいつも真夜中なのですねと、話を切り出しました。奇妙な抑揚で言葉を話したので、何を言っているのかははっきりとは分かりません。だから、本当は話していたと思ったこととは違うことを話していたのかもしれない。

「必要なものはすべて揃っている」

と伝えても、セールスマンには聞こえないようでした。手に持っていた鳥かごを丁重に差し出すと、プレゼントだと言うのです。

「お近づきになったしるしに、この鳥かごをプレゼントさせていただきますか。なにしろ深海の水でできた鳥かごは今ではそうそう手にはいるものではありません。

今頃の流行ですと、水銀の鳥かごということになりますが、あれはいけません。あれに鳥を入れておくと、あっという間に鳥は気がふれてしまいます。

鳥かご選びで大切なことは、その鳥かごに昔別の鳥が住んでいたかどうかということです。一度他の鳥が住んだ鳥かごは、新しい住人となじめずに心を閉ざしてしまったり、奇妙な歌を歌い続けたりするものです。鳥かごらしいといえば鳥かごらしい話ですが、そうになると、新しい住人となった鳥は、それこそあっという間に気がふれてしまうのです。

その点、この鳥かごなら安心です。深海には鳥は一羽もいませんからね。是非、この鳥かごをお受け取りください。

もしも、鳥かごの中に鳥を住ませたいとお思いになられたら、是非ともわたくしにお申し付けください。わたくしどもは世界中のありとあらゆる鳥を準備しております。どんな鳥でもご用意いたしますよ。

いえいえ、勿論、鳥をお飼いにしたいと思われた時の話です。

さて、そろそろおいとましなければ。
何であれご用の節は、こちらまでご連絡ください。
これからご贖いいたします」

そう言って渡された名刺は、大きな灰色の羽根のように見えるのですが、手触りはただのボール紙の切れ端です。

ききとりにくいセールスマンの言葉は、あるいはこうだったのかもしれませんが。

「おじぎをする鹿は死にました。大通りの角は喜んで左折してただけです。名前が白い真実は涌きだして、とはいえ想像してばかりいるものです。ありません。
暇なごろつきは風邪をひいてストライキです。スイカの誤解というものですな。なりものいりです。晴れば行けます行けません。あのひとにと、利益を見込んでおくと、餡と芋も愛の通り道でふれあうのです。

一人豪華に偉ぶって対戦する後頭部は、そそのかす過去と蒸したベジタブルの努力が寸止めで痛いか鈍感かという理由です。

落ち度はかなえられた済んだことだと、辺りを自由になめまわすコオロギを討伐してしまうまがまったり。昨日から裏を洗いつけた利益のモノリスです。一人でご来光の糸巻きとは、理科ごはんの箸なしです。想像と当たる四十七の祟りは、そらまめ熱く樋のまにまに霧がふたをしたまうまうの脳です。

その点、箱の理科ごはんは餡が芯です。心外な心臓売りの市場も今は戦艦ね。精神否定、自己の取り合いを受け売りしてください。

燃えてしなびてまた燃えてと、理科ごはんの名前に通りをすぎても戻りたいと、大盛りにな

る手紙たちは、精神否定友達綿飴。アーユルヴェーダの取り合いを順番に折り合いをつけて、ドンファンを取り柄とあれば、もごもご酔いの痛ましくです。

冷え冷えとした葱鍋は、王冠に似た瓜の旗。それとも重たいときの花。

さめてきた。争論として追い落とし増し流し。

名前もコヨーテもせっかちで、こらこらちわわで五個レンコン白菜。

からからのご病気にお姉さんもいたましい」

たぶんこれがセールスマンの言いたかったことなのでしょう。

この世の終わりの家の床にセールスマンの置いていった鳥かごは、満月の光を浴びなくても、いつまでも深い青色に輝いていました。

その七 靴の右足

この世の終わりの家にたった一人で住んでいたのは、誰かの靴の右足でした。

この世の終わりの家の窓から見えるのは真夜中だけです。空の中心にはいつも満月が浮かんでいて、夜の闇の中にいて見えないものは何一つありません。

靴は窓辺に置いた青色の鳥かごの中で、窓から見える満月をずっとながめていました。鳥かごの中なら安全だからと、外に出ることはありません。

危険を感じるようになったのは、靴ひもが切れたときでした。窓を開けたままだったのが悪かったのでしょうか。重い光の塊が月からこぼれて落ちたのは、ちょうど靴の右足の上でした。靴ひもはピンクと青と赤の三色で、靴の右足はこの世の終わりの最後の時まで、一緒にいられると思っていたのです。

切れてしまった靴ひもは、満月の光に焼かれると、赤サビ色一色に変わっていました。ひもの切れたところからは、なにかがどろどろと流れでてきます。靴の右足はそのどろどろを嘗め

てみたのですが、それは甘いシロップでした。靴の右足は裏切られたような気持ちになって、もう二度と靴ひもなんかしないでおこうと心に決めたのです。

鳥かごの中はいつでも鳥のにおいがします。この鳥かごに鳥が住んだことは一度もないとセールスマンが言っていたのは嘘だったのでしょうか。そのうえ、鳥かごの底にはフンで汚れた鳥の羽根がたくさん落ちていて、乾けば乾くほどいやなおいは強くなってきます。

羽根の下からは小さなノートも見つかりました。ノートには見たこともない文字でぎっしりと何かが書いてあります。靴の右足はそれが、前に住んでいた鳥の日記だとにらんでいます。日記でなければ、そんなところに隠しておくわけがありません。とはいえ、よりもよってフンの下に隠すとはなんと愚かな鳥なのでしょう。

靴の右足は、途中になっている日記の続きを書いてみようかとも思うのですが、フンのにおいのする日記を平気で続ける気持ちにはなれませんでした。靴の右足は、何故か不愉快になりながら、羽根の下に日記を戻して、また満月を眺めます。

右側の店の右側のセールスマンがこの世の終わりの家にやってきたのは、靴の右足が住んでいるという噂を聞きつけたからなのに違いありません。プレゼントだと言って鳥かごを置いていってから、右側のセールスマンは月の光が弱まるたびにこの世の終わりの家を訪れました。

セールスマンが靴の中から取り出すパンフレットはどれも右側だけのカタログです。右側の店には右側しか売っていないのだとセールスマンは言います。

鳥かごの前に立ち、靴の右足に見えるようにカタログを広げ、セールスマンは様々な品物を勧めます。でも靴の右足が欲しいのはたったひとつ、自分の靴の左足だけです。靴の右足は、カタログの中から自分にそっくりの靴を探してページをめくりますが、最初のページから最後のページまで、靴の左足の写真はどこにもみつかりません。

「このカタログには世界のすべての靴の右足が載っているのです。どうしてお客様のお求めの写真がないのでしょうか」

そう言って右側のセールスマンは頭を抱えてしまいます。

セールスマンは、鳥かごの中と外で見ているから何か見落としたのかもしれないと言い、中

に入ろうと鳥かごの扉を開けました。セールスマンというものは商売のためならどんなところにでも行くものです。

足や腕を奇妙な角度に折り曲げて体を小さく折り畳んだ右側のセールスマンは、ぐねぐねと体をうごめかせ鳥かごの入り口を通り抜け中にもぐりこみました。それでもセールスマンは鳥かごよりも大きいのです。靴の右足は、鳥かごの隅に押しつけられて息もできません。

そのうえカタログを開くから、靴の右足の靴底は右側のセールスマンの顔にぴったり押しつけられ、セールスマンのわき腹には靴のつま先がめり込んでしまいます。セールスマンの口元から伸びた鋭い髭の先端が靴の右足の中敷きをくすぐって思わず声も漏れてしまいます。

カタログの最初のページから最後のページまで、何度も何度も調べたのですが、靴の左足の写真はありませんでした。右側のセールスマンは真っ赤になって、こんなはずは、とか、ありえない、とかうなりながら、絶対にあるはずなのです、ないはずはないのですとつぶやきながら、最後は一人でカタログを夢中になってめくり続けています。

うんざりした靴の右足が、カタログから目を離し、ちらっと満月を見たときです。右側のセールスマンの目が急に鋭くなり、カタログの空白のページを開いたと思うと、靴の右足をページの間にはさみこみ、動けなくしてしまいます。抵抗しようとしても、靴の右足だけではセールスマンにはかないません。靴の右足は白いページの間につま先から踵まで、まるごと閉じこめられてしまいました。

右側のセールスマンが最後にくいっとカタログを傾けたとたん、靴の右足は厚みを失いカタログの中に吸い込まれ、鳥かごの中から消えてしまったのです。

右側の店の右側のセールスマンは、それからゆっくりと鳥かごを出て、体中の関節を元に戻し、カタログの新しい写真をながめ、満足そうでした。

「こんな奇妙な形の鳥は初めてだな」

そう言って、右側のセールスマンは鳥かごの中に腕をのぼし、鳥かごの床のフンの下に隠したノートを取り出します。セールスマンは棘の生えた舌で鉛筆の芯をなめなめ、新しく手に入れた鳥のことをノートの続きに書いてから、また元の場所にもどし、フンのついた鳥の羽根を慎重に上にかぶせます。

それからタバコを一服すると、吸い殻を床に放り投げ、鳥かごと鞆を手に持って、右側のセールスマンはこの世の終わりの家から帰ってゆきました。

満月を見上げると、セールスマンの大きな目は瞳孔が縦に細く閉じ、月の命もねらっているようです。

セールスマンは真夜中の道を歩きながら歌を歌います。

鳥は大好き

鳥はすてき

鳥かごの中の鳥ならなおさら

鳥かごの鳥はとてもおいしい

鳥はいつも鳥かごにすんでる

危険もなく靴ひももない

幸せな鳥にはよだれが似合う

鳥は大好き

鳥はおいしい

鳥かごの中の鳥ならなおさら

鳥かごの鳥はいつもおいしい

鳥かごにすんでいるのはみんな鳥

危険もなく水銀もない

鳥かごにすむのはみんな鳥

鳥かごにいらっしやい

幸せな鳥かごに

鳥かごにはいったら

みんな鳥になる

鳥はおいしい

ぼくのごちそう
鳥かごにいらっしやい
ぼくの鳥かごに

歌は地平線を三つ越えるまで聞こえていました。

その七+∞ 靴の左足

この世の終わりの家にたった一人で住んでいたのは、確かに靴の左足でした。

この世の終わりの家の窓から見えるのは永遠に真夜中だけです。空の中心にはいつも満月が浮かんで輝いています。月の光は、すぐに死んでしまう夜の闇のかわりに新鮮な夜の闇を産み続けていました。

靴の左足は窓辺で静かに夜空を見えています。満月はあとからあとから内側にあふれる光のせいで膨れ続け、もうすぐ夜空よりも大きくなってしまおうでしょう。まぶしすぎるのでサングラスが必要かもしれないと、このごろ靴の左足は考えています。

満月が大きすぎて、今では深海にいて空を泳いでやってくるさかなも姿を見せません。新しいろこが手に入らないのでは、どんな手紙は届く前に燃えてしまいます。中にはポストに入れる前に燃え始める手紙もあります。もう長い間、靴の左足には手紙が届いていませんでした。

この世の終わりの家は岩だらけの地面に建っていて、裸足で歩くと足の裏に穴があき、血が出て止まらなくなります。それでも裸足で歩くものは後を絶たず、家のまわりには血を失って眠り続けている骸がたくさん横たわっています。

どうしてそんなところをうろつくのだろうと、靴の左足は思います。家の中でじっとしていればいいのです。靴の左足は靴ひもがいなくなってから、どこにもでかけたことはありません。もしも靴ひもがまだいたら、靴の左足が家の中でじっとしていたかどうかは分からないのですが。

満月から光の大きな塊がこぼれ落ちて、窓のガラスをつきやぶり落ちたのは、靴の左足の上でした。満月の光に直接触ったものは気がふれてしまいます。おかしくなった靴ひもはするりとひも穴をすり抜けてこの世の終わりの家の勝手口からどこかに行ってしまいました。靴ひもは、紫と緑と白の三色ストライプの長めのひもでした。靴の左足は、ずっとこの世の終わりの最後の時まで、靴ひもと一緒にいられると思っていたのです。

靴ひもは、きつと岩場で血を垂れ流し、赤さび色一色になって眠っているのでしょうか。もう動けない靴の左足には、確かめることもできません。でも、靴ひもから流れ出る血は甘いシロップだということは知っていました。考えるだけで靴の中に唾液があふれてくるのです。

この世の最後の家の中はいつでも鳥のにおいがします。この家に鳥が住んだことは一度もないとセールスマンが言っていたのは嘘だったのでしょうか。そのうえ、床の上にはフンで汚れた鳥の羽根がたくさん落ちていて、乾けば乾くほどいやなおいは強くなってきます。

羽根の下からは小さなノートも見つかりました。ノートには見たこともない文字でぎっしりと何かが書いてあります。靴の左足はそれが、前に住んでいた鳥の遺言だとにらんでいます。遺言でなければ、そんなところに隠しておくわけがありません。とはいえ、よりもよってフンの下に隠すとはなんと愚かな鳥なのでしょう。

靴の左足は、途中になっている遺言の続きを書いてみようかとも思うのですが、フンのにおいのする遺言を平気で続ける気持ちにはなれませんでした。靴の左足は、フンだらけの羽根の下に遺言を戻して、また満月を眺めます。

左側の店の左側のセールスマンが靴の左足をこの世の終わりの家に連れてきたのは、靴の左足はこの世の終わりの家に住んでいなくてはならないと考えたからなのに違いありません。プレゼントだと言ってこの世の最後の家の鍵をくれてから、左側のセールスマンは月の光が弱まるたびにこの世の終わりの家を訪れました。

セールスマンが靴の中からは取り出すパンフレットはどれも左側だけのカタログです。左側の店には左側しか売っていないのだとセールスマンはうれしそうに話します。

この世の最後の家の窓の外に立ち、靴の左足に見えるようにカタログを広げ、セールスマンは様々な品物を勧めます。でも靴の左足は欲しいものなどなにひとつありません。それより

セールスマンが裸足なのかどうなのかのほうに気になるのですが、それを尋ねるのは不躰なことです。

どんな写真も違うと言う靴の左足に、

「このカタログには世界のすべての靴の左足が載っているのです。どうしてお客様のお求めの写真がないのでしょうか」

そうやって左側のセールスマンは頭を抱えてしまいます。

セールスマンは、窓の中と外で見ているから何か見落としたのかもしれないと言い、この世の終わりの家の中に入ろうと入口の扉の鍵穴に指をつっこみました。セールスマンというものは商売のためならどんな鍵穴も通り抜けてしまうものです。

足や腕や胴体をバラバラに分解し、左側のセールスマンは、体の破片毎に鍵穴を通り抜けて家の中に入り込みました。それからバラバラの体を組み立て直し、元の姿に戻ります。かさばるカタログは家の外に置いたままです。

この世の終わりの家の中でセールスマンは元の姿ではありませんでした。靴の左足は窓に映して見ていたのです。組み立て方を間違えたのに気づいていました。

セールスマンは頭から胴体そして足の先まで、紫と緑と白の三色ストライプになって、まるで靴ひもです。セールスマンはそれに気づいていないのか、鼻歌をうたいながら靴の左足に背後から忍びよります。

「いいこだいいこだ、じっとしておいで。こんな奇妙な形の鳥ははじめてだよ。大事にしてあげるからね」

どうも靴の左足を捕まえようとしているようです。

靴の左足の真後ろに立ったセールスマンが、ジャンプして靴に飛びかかると、足がすべったのか手がすべったのか、セールスマンは靴のひも穴に頭から吸い込まれてしまいました。

セールスマンは声も出せません。すでに靴ひもになっていたのでしょうか。靴ひもがしかるべき位置に固定されると、靴の左足は、窓辺から飛び降り、家の中を歩き回ります。

しばらく見ない間に、この世の終わりの家の壁や天井は穴だらけです。なくなった壁や天井の一部分もみんな岩場で眠っているのでしょうか。

勝手口は鍵もかけずに開けたままです。クローゼットには空っぽのトランクがたくさん放り出してあります。

天井の穴からも真夜中の夜空に浮かぶ満月が見えます。もうすぐ満月は夜空よりも大きくなるのでしょうか。光がひどく青ざめていて、家の中はまるで深海のように青く暗く冷たいのです。

靴の左足は、空腹な鳩の鳴き声のまねをして、ドアや窓の鍵を全部締め、裏庭の岩場に向かいました。

そろそろ眠る時間です。

眠っている間に世界は終わってしまうのでしょうか。

今なら靴ひもも一緒にいるから、それでもいいかなと、靴の左足は思うのでした。

その八 セールスマン

セールスマンは薄いスーツケースと鳥かごを持ち、この世の終わりの家を訪れました。ずいぶん昔のことです。

そのときも、この世の終わりの家の窓の外は真夜中でした。夜空の中心にはいつも満月が浮かんでいて、夜の闇をさらに暗く隠しているのです。

どこか遠いところから来たというそのセールスマンは、このあたりはいつも真夜中なのでねと、話を切り出しました。奇妙な抑揚で話をしたので、何を言っているのかはつきりとは分かりません。だから、違うことを話していたのかもしれない。

セールスマンは夜の闇で仕立てたように黒いコートを着て、満月の光の中にも、また別の夜がそこにあるようです。

「必要なものはすべて揃っている」

と伝えても、セールスマンには聞こえないようです。手に持っていた鳥かごを丁重に差し出すと、プレゼントだと言うのです。

「お近づきになったしるしに、この鳥かごをプレゼントさせていただきますか。なにしろ深海の水でできた鳥かごは今ではそうそう手にはいるものではありません。

今頃の流行ですと、水銀の鳥かごということになりますが、あれはいけません。あれに鳥を入れておくと、あっという間に鳥は気がふれてしまいます。

鳥かご選びで大切なことは、その鳥かごに昔別の鳥が住んでいたかどうかということです。一度他の鳥が住んだ鳥かごは、新しい住人となじめずに心を閉ざしてしまうことがよくあります。鳥かごらしいといえば鳥かごらしいのですが、そうすると、新しい住人となった鳥は、あっという間に気がふれてしまうのです。

その点、この鳥かごは安心です。深海には鳥は一羽もいませんからね。是非、この鳥かごをお受け取りください。

もしも、鳥かごの中に鳥を住ませるのでしたら、是非ともわたくしどもにお申し付けください。わたくしどもは世界中のありとあらゆる鳥を準備しております。どんな鳥でもご用意いたしますよ。

いえいえ、勿論、鳥をお飼いになりたいと思われた時の話しです。

さて、そろそろおいとましなければ。

何でもご用の節は、こちらまでご連絡ください。

これからご最真にお願いいたします」

そう言って渡された名刺は、大きな灰色の羽根のように見えたのですが、手触りはただのボール紙の切れ端としか思えないのです。

ききとりにくいセールスマンの言葉は、あるいはこうだったのかもしれませんが。

「おじぎをする鹿は死にました。大通りの角は喜んで左折してただけです。名前が白い真実
は涌きだして、とはいえ想像してばかりいるものです。ありません。

今頃の流行ですと、水銀の鳥かごということになりますが、あれはいけません。あれに鳥を
入れておくと、あっという間に鳥は気がふれてしまいます。

鳥かご選びで大切なことは、その鳥かごに昔別の鳥が住んでいたかどうかということです。
一度他の鳥が住んだ鳥かごは、新しい住人となじめずに心を閉ざしてしまうことがよくあり
ます。鳥かごらしいといえば鳥かごらしいのですが、そうすると、新しい住人となった鳥は、
あっという間に気がふれてしまうのです。

その点、この鳥かごは安心です。深海に鳥は一羽もいませんからね。是非、この鳥かごをお受
け取りください。

もしも、鳥かごの中に鳥を住ませるのでしたら、是非ともわたくしどもにお申し付けくだ
さい。わたくしどもは世界中のありとあらゆる鳥を準備しております。どんな鳥でもご用意
いたしますよ。

いえいえ、勿論、鳥をお飼いにになりたいと思われた時の話しです。

さて、そろそろおいとましなければ。
何でもご用の節は、こちらまでご連絡ください。
これからご最良にお願いいたします」

もしかするとセールスマンは、本当はセールスマンではなかったのかもしれませんが。

その九 本

この世の終わりの家に住んでいたのは本でした。

本は7255ページあり装丁も特別頑丈にできていたのですが、開いたとたんにバラバラになってしまえばもうそれは本ではありません。いつか読まれるときのことを思うと本は不安でたまりませんでした。

この世の終わりの家の窓から見えるのは真夜中です。夜空の中心ではどんなときでも満月が銀色の細長い光をこぼしつづけています。空の上から落ちてくるものはすべてが冷たく凍っていました。鳥もさかなも誰かの手紙も、空から落ちてくるときはみんな氷です。

本は窓辺からも暖炉からもクローゼットからも遠いテーブルの上に住んでいます。窓辺では雨が吹き込んでくるかもしれません。この世の終わりで雨が降ったことなど一度もないのですが。暖炉の上では火が燃え移るかもしれません。暖炉に火をともしたことなど一度もないのですが。クローゼットではトランクの中にしまわれたまま、忘れられてしまうかもしれません。この世の終わりの家にトランクなど一つもないのですが。

本は窓辺からも暖炉からもクローゼットからも遠いテーブルの上で、自分に何が書かれているのかを想像しています。それが難解な哲学なのか、悲痛な恋愛小説なのか、冷徹な解剖学の図版であるのか、深海に棲むさかなの写真集であるのか、それとも金のために書かれた卑猥なポルノであるのか、あるいはそれらすべてが書かれているのかもしれません。しかし本にはそれを確かめる術もなく、ただ想像を続けるだけでした。

テーブルの上の本のすぐ傍には水差しがありました。誰が何のためにそこに置いたのかは分らないのですが、水差しには水がたっぷり入っていて、その表面に生まれる水滴が水差しの表面を伝ううちに、大きな水滴になり、テーブルの上をぬらします。水差しのまわりに溜まった水は四方に広がり、テーブルの端に到達すると、床の上に落ちてゆきます。

本は、水差しから流れてくる水に濡れたことがあります。そのとたん悪寒がして意識を保つことも難しいほどに衰弱してしまいました。きっと、あの水で濡れた部分は、もう読めなくなってしまうのではないだろうか、本は心配でたまりません。今でも下になっている表紙とテーブルとの間にそのときの水が残っていて、すこしずつ本の内側へしみこみ続けているような気がしてならないのです。もしもそうになったら、本に印刷されている文字はみなふやけ形はゆがみ、誰にも読むことができなくなってしまうでしょう。もしもそうになったら、本に何が書かれていたのかなど、もう確かめることはできなくなってしまうでしょう。

本は自分とテーブルの間にしみこんでいるかもしれない水のことを考えるだけで、崩れて形をなくしてゆく自分の姿が分かるのです。

テーブルの本のすぐ傍には水差しではなく灰皿がありました。誰が何のためにそこに置いたのかは分からないのですが、灰皿には火のついたタバコが忘れられていて、今にも灰皿の外に落ちそうです。灰皿から落ちたらその火はテーブルを焦がしいずれ家中に燃え広がるでしょう。

本は灰皿のタバコが分厚い表紙の上に落ちて燃えたことがあります。そのとたんめまいがして、息がつまり何も考えられなくなってしまいました。火は上の表紙を焼き尽くすと同じように中のページを上から順番に一枚一枚燃やし続け、丹念に灰に変えてゆくのです。今でもあの火は消えておらず、小さな火の種となって本のページのどこかに潜んでいるのかもしれない。そしてときどき火の本性を現わしあちらのページ、こちらのページと燃やし続けているのではないのでしょうか。もしもそうなったら、本に印刷されている文字はみなただの焦げ跡に変わり、誰にも読むことができなくなってしまうでしょう。もしもそうなったら、本に何が書かれていたのかなど、もう確かめることはできなくなってしまうでしょう。

本はページの間に隠れ潜んでいるかもしれない火のことを考えるだけで、燃え殻になって夜空をとばされてゆく自分の姿がわかるのです。

テーブルの本のすぐ傍には水差しでも灰皿でもなくトランクがありました。誰が何のためにそこに置いたのかは分からないのですが、トランクは鍵がはずされ、どんなものでもその中に入れることができそうです。本のすぐ傍でトランクの蓋はみだらなほど大きく開かれたまま、本が放り込まれるのを待っていました。

本はトランクの中に間違っに入れられてしまったことがあります。いったい誰がそんなことをしたのか、今となっては確かめようもありません。本が中に入ったとたん蓋は勢いよく閉じ、偶然でもあるかのように高らかに鍵のかけられた音もしたのです。暗闇の中で本には何も見えません。そのまま永遠にトランクの中に閉じこめられてしまっは、誰も本がどこにあるのかも分からなくなってしまうでしょう。あのトランクはまだ本を閉じこめたままなのかもしれません。もしもそうだったら、トランクの闇の中で誰もなにひとつ本の文字を読むことはできなくなってしまうでしょう。もしもそうだったら、本に何が書かれていたの

かなど、もう確かめることはできなくなってしまうでしょう。

もしもそうだったら、この世の終わりの家は、あのトランクなのかもしれません。窓の外の真夜中は、確かにトランクの中の闇にそっくりです。あの満月は、トランクに開いた大きな穴で、そこから誰かがこの世の終わりの家のことを観察しているののかもしれません。本は窓辺にいたことがないので、そんな誰かがいるのかいないのか、本当のことは分からないのです。

本は一度だけ窓辺に置かれていたことがありましたが、いったい誰がそんなことをしたのか、今となっては確かめようもありません。火に炙られて黒こげになり何も隠すことのできなくなった表紙の残骸の間から、水にふやけてにじんだ文字を、満月の光の中から覗いているだれかが読みあげていました。高くてかすかな声です。「爪乃大佐は発展し老化しみだりに偽装したわ」そうも聞こえたのですが、言葉は耳に到達するよりずっと前に氷になってしまっているのです、違っていたのかもしれません。あるいは「つめたいさかなてんしびえろきのみぎがわ」と言っていたのかもしれません。

もしもそうだったら、本に書かれていることは誰もがすでに知っていることなのでしょう。もしもそうだったら、本に何が書かれていようと、もう誰も確かめようとはしないでしょう。

テーブルの本のすぐ傍には水差しも灰皿もトランクも、窓さえありませんでした。テーブルの上にいたのは本だけです。本は7255ページありました。装丁も特別頑丈にできていました。

その十 うさぎ

この世の終わりの家に住んでいたのはちいさなうさぎの方でした。

この世の終わりの家の窓から見えるものについては、もう聞きあきた頃でしょう。それでも満月は夜空の中心にいてすこしも動かずに、すこしずつ光のかけらを地面にこぼしているのです。

うさぎはのっそり床の上を歩き、窓の中の満月を見上げて、この世の終わりの家の柱をかじります。こりこりこりとうさぎの前歯が柱をかじる音は家の中に響きます。柱はこの世の終

わりのために特別に誂えられた木でできています。うさぎがどれだけかじってもなくなることはありません。

うさぎはこの世の終わりの家の中を食べ物と配偶者を求めて探し続けています。もうずいぶん長い間何も食べていないような気がします。この世が千回は終わったくらいの間何も食べていないような気がします。おまえはもう餓死してしまったんだと言われても信じてしまいそうです。もうずいぶん長い間交尾をしていないような気がします。この世の終わりの繁殖期が千回は終わったくらいの間精子を体外に排出していないような気がします。そうです。うさぎは牡だったのです。体の一部を硬直させたままいくつこの世が終わったのでしょうか。何故かうさぎはその終わりのどのひとつの終わり方も思い出すことができません。性欲か昂進しあたまがおかしくなっているのでしょうか。思い出すのはこの世の終わりの家の柱をかじらなくてはならないということだけです。

うさぎがこの世の終わりの家の二階にある図書室でみつけたものは、インクのおいのするたくさんの乾燥した植物の加工食品でした。これだけあればこの先また幾つものこの世終わりを無事に過ごすことができるでしょう。インクのせいでうんちがいずれ真っ黒になってしまうのは確かですが、うさぎのうんちなどいつの世でも真っ黒なものとは決まっています。

うさぎがこの世の終わりの家の地下室にあるクローゼットでみつけたものは山のように積み上げられた卵でした。どの卵も殻はもう透明になっていて、今にも生まれてきそうです。卵の中では目玉がぎよろぎよろとあたりをうかがい、うさぎが動くとき大きな瞳は揃ってうさぎのことをみつめるのです。うさぎは口を小さくあけて息で空気が動かないように注意しながら、クローゼットから逃げだしました。鍵は確かにかけたのです。卵が孵って逃げ出さぬように、入り口はしっかり閉めたのです。

うさぎがこの世の終わりの家の窓の外にみつけたものは、真夜中の夜空でした。あるいはこの世の終わりの家の窓の外にいるうさぎを真夜中の夜空がみつけたのかもしれませんが。窓の外の中庭には真夜中以外にも、椅子やテーブルや断崖や雌のうさぎの形に剪定された庭木がありました。それが本物の椅子やテーブルや断崖や雌のうさぎだったとしたら、きっと庭木の物まね大会が中庭で開かれていたのです。うさぎの目には植物しか映らないので本物かどうかは分かりません。

うさぎは庭木の間から庭木でできた椅子の上に飛び上がり、庭木でできたようなテーブルに

よじ登ると庭木でできたような断崖を駆け降りて、庭木でできたような雌のうさぎに飛びつきました。庭木でできたような雌のうさぎは即座に子供をはらみ、たちまち七匹の子うさぎを産んだのですが、七匹のうち六匹までがうさぎではなく盆栽でした。ということはやはり雌のうさぎは剪定された庭木だったのでしょう。

それでも盆栽はどれもうさぎに似ていて、うさぎの子孫なのは確かです。最後の一匹もうさぎに似てはいましたが、うさぎとは違って生まれつきとても大きいのです。そんなに大きくては図書室の乾燥植物など一食でなくなってしまう。うさぎは庭に落ちていた虫眼鏡をあわてて裏返してのぞき込みました。そうすると大きなうさぎの子供は前歯よりも小さくなるのです。

ちいさくなった子うさぎは、ちいさくなった中庭で、ちいさくなった椅子やちいさくなったテーブルやちいさくなった断崖をむしゃむしゃと片端から食べてしまいます。もしも元の大きさだったら、この世の終わりがもう二つは増えていたことでしょう。

子うさぎに食べられてしまう前に、うさぎは雌のうさぎの手をとって、この世の終わりの家の中に逃げ込みました。

そして交尾の時間です。窓の外の実夜空のまんなかの満月がすべてを見ているというのに、うさぎはたくさんの子供を産んで、この世の終わりの家の中はうさぎだらけになりました。

うさぎのうんちが床の上に厚く踏み固められて、その上を卵から孵った目玉が駆け回ります。クローゼットの錠は壊れていたのかもしれませんが。確かに錠はかけたのですから。

卵から孵った目玉の足跡と剪定された庭木のような子うさぎの足跡がフンの上で混ざりあいどこかの国のアルファベットになっています。それを読むことができるのは古い本だけでしょう。でもこの世の終わりの家には本など一冊もありません。アルファベットは新しい足跡によって形を変えながら、伝えたいことは失われていきました。

卵から孵った目玉は生まれつき分厚い羽根を持っていて、この世の終わりでも寒さだけは感じることはありません。走り回るうちにぬけ落ちた羽根がこの世の終わりの家の床に降り積もります。羽根の上でならどれだけ駆け回っても怪我をすることはないでしょう。

この世の終わりの家の入り口のドアの前でうさぎは、雌のうさぎと抱き合いながらキスをし

て誰かが来るのを待っています。誰かが来る約束はずいぶん昔からあったのですが、これだけ子供が生まれては、それが誰だったのかなど思い出せるわけ也没有せん。うさぎの口はキスに向いていないのか前歯がかちかち当たります。それでもうさぎは最後のときまで、雌のうさぎとキスをしていようと思っっています。雌のうさぎの口の中からはずっと草のにおいがしていました。

その十一 星

この世の終わりの家に住んでいたのは星でした。この世の終わりが始まったところに空からいなくなった星です。擬人化されていることを気にもかけず、星は家の中で空中をゆっくりと回りながらかすかに輝いています。

この世の終わりの家の窓から見えるのは真夜中だけです。満月は夜空の中心からすこし離れたところにおいてすこしも動かずに、おおきめの光のかけらを地面にこぼしています。そして満月からそう遠くないところに、満月と同じほどの半径の三日月がこれもやはりじっと動かずに浮かんでいます。三日月からこぼれる光のかけらは満月よりも小さいけれど、満月よりもよく冷えていて、夜空ではより遠くまで届きます。

三日月の光よりもかすかに輝く星がこの世の終わりの家の窓辺にいることに天体学者はずっと気づいていました。

この世の終わりの家の東にある砂漠をまっすぐ進み、地平線を五つ越えたところに天体観測所があります。砂漠の真ん中は乾燥していて夜空とほとんど変わらないので天体を観測するのにこれ以上望ましい場所はないのだと天体学者は主張します。この世の終わりではどこにいても夜空だというのに、天体学者は真夜中の闇は砂漠で最も真夜中になるのだと主張します。そんな誰にも意味の分からないことを主張して、この世の終わりののはじまりのとき天体学者はみんないなくなりました。砂漠よりもっと夜空に近い場所を見つけたのかもしれませんが。今、砂漠の真ん中の天体観測所で星を観測しているのはうす紫色のさかなだけです。

うす紫色のさかながずっと観測しているのは、この世の終わりの家にいる星です。この世の終わりの家にいる星の組成と生い立ちのすべてをさかなは知っているのですが、この世の終わりの家がどこにあるのかは知りません。それこそが夜空に残された最後の秘密なのだと、うす紫色のさかなは考えています。

この世の終わりの家の西にある森をまっすぐに抜けて、その先の森を五つすぎたところに天体観測所があります。森に存在する無数の葉っぱが夜空の雑音をすべて吹き尽くしてしまうので、真夜中の星の乱れなき姿を観測するのに森よりも適した場所はないのだと天体学者は主張します。

森に吸収された雑音は森の木々の根をつたわって地面の下に集まり、地下を流れる音になります。ギザギザの形だったりつると丸い形だったりあるいはとぎれとぎれだったりする地下の音はすこしずつ集まって大きな流れにかわってゆきます。そして、そのたびに音と音が打ち消しあってどんどん静かになってゆき、やがてあらゆる音が消えたとき、その流れは海になります。

どんな音もどんな声も海は吸い尽くしてしまうので、海辺の砂浜にはなにひとつ音がありません。どんなに大声で叫んでもどんなに大きな爆発を起こしても、音は生まれる前に海に吸いこまれなにも聞こえなくなるのです。

森の天体観測所では黄色と水色に少しだけ赤色の混じったしま模様のなめくじが、この世の終わりの家にいる星を観測しています。なめくじは星の真実の姿がたまごだということを知っています。あとすこしして殻が溶け落ち、たまごから生まれてくるものを最初にみつければ、それに自分の名前をつけられます。黄色と水色に少しだけ赤色の混じったしま模様のなめくじは、たまごから星から生まれたものに自分の名前をつけようともうずいぶん長い間、眠りもせずにたまごを星を観測し続けています。もうすぐたまごは星は孵るでしょう。もうすぐ生まれてくるでしょう。

ただ、すっかり忘れているのですが、なめくじは自分の名前を知らないのです。

この世の終わりの家から目を閉じてずっと歩き続けるとそこは国道です。靴を通して感じる地面は国道のように堅く国道のようになめらかです。車がどんどん追い越して行きます。クラクションを鳴らす車は一台もいません。こんなに静かなのは、車が一台も通っていないからなのかもしれません。国道は目を閉じて歩かなければならないので、たくさんの車が走っているのか、それとも車など一台もないのか、それはどうしてもわからないのです。

国道の終わりには天体観測所があります。国道はまっすぐ天体観測所の中に通じていて、どこまでが国道でどこからが天体観測所なのかはよく分かりません。途中で立っている深紅の色の看板には「国道天体観測所」と真っ赤な文字で書いてあります。国道天体観測所だという

ことを簡単には知られたくないのかもしれませんが。

目を閉じたまま国道天体観測所に入ると建物の中は真っ暗です。星の観測に必要なのは暗闇だけです。天体観測所には窓ひとつなく目を閉じていなくても完全な闇の中ですが、星に対する尊敬をこめてみんな目を閉じているのです。

国道天体観測所にすんでいるのは深海で生まれた虹色のカニでした。暗闇の中で夜空に輝く星のことを思い続けることが、カニの仕事です。ときどき体の奥からオレンジ色にぼんやりと輝く空気の泡が生まれ、カニの胸のあたりから空に浮かんでゆきます。オレンジ色の泡はゆっくりと空へ昇って行って星に届くはるか以前に天体観測所の天井に当たります。カニはずっと目を閉じているので、泡は星のいるところまで昇っていったのだと信じているのですが、結局はそういうことなのです。

虹色のカニの甲羅にはたくさんのメモが書かれていました。

「四季の冷凍約束」

「海底ソバージュと橋渡り」

「落下の一秒で貸借表」

「支払い警察の錆」

何一つ音のない深海で生まれたカニは言葉が分からなかったので、メモに見えたものはもしかすると生まれつきの模様だったのかもしれませんが。

空では三日月と満月が空には自分しか存在しないかのようにそっぽをむいて浮かんでいきます。三日月は満月と視線をあわせません。満月も三日月と視線をあわせません。ただ光のかけらを空から落としているだけです。

その十二 ピアノ

この世の終わりの家に住んでいたのはピアノでした。白い鍵盤と黒い鍵盤がすべて一つにつながっていて、もうどんなメロディも奏でられない古い形のピアノです。

この世の終わりの家の窓から見えるのはいつも真夜中です。真夜中の夜空の中心にはずっと

満月が輝いて、休みなく光のかけらをこぼします。堅い光のかけらが地面にあたると大きな音を立てるから、眠っていてもすぐに目が覚めてしまいます。

この世の終わりではもうずいぶんと長い間、誰も眠っていませんでした。ピアノはこの世の終わりの家の北側のずっとむこうまで舗装された広場をまっすぐに進み、公園の向こうで地平線を五つ越えた先の空白の病院で不眠症の治療を受けています。

空白の病院には三人の医師がいて患者を順番に診察していました。どの順番かは運次第です。

最初の医師の右手は冷たくていつも湿っています。深海から歩いて来たのです。症状を聞くたびに、スカートの下から見えているおびれがぶると震えます。おびれから飛び散る水は深海の水です。その瞬間だけ、診察室から一切の音が消えてしまい、部屋の中はなつかしい深海のようです。看護師があわてて飛び散った水をスポンジで拭うのですぐに音は聞こえるようになるのですが、掃除をした看護師からは永遠に音が消え、やがて行方不明になってしまいます。

二人目の医師は床から生えていました。床を突き抜けてその下の地面に根を張っているのです。おそらく植物なのでしょう。患者の心臓に触れる手のひらからぼろぼろと乾いた砂をこぼしていたのは、砂漠で生まれた植物だからです。砂漠の砂は近くにある水分を吸ってどんどん大きくなってゆきます。水さえあればふくれてゆくので、すぐに大きな岩石に変わります。そして、水を吸いすぎた砂は、病院よりも大きな岩山になります。空白の病院の周辺にあるたくさんの岩山はそんなふうにしてできたものです。

患者の心臓に添えられた医師の手は、しばらくそのままにすると心臓から離れようとしなくなります。手のひらの砂が心臓の水分を吸い続け胸に食い込んでしまうからです。患者の心臓が乾ききってしまう前に、看護師が二人がかりで医師の手のひらを心臓から剥がします。無理矢理剥がしてしまうので、医師の手のひらの跡が心臓に残り、患者はすこしだけ寒さに震えます。

診察室の床に散らばった砂をほうきであつめるのは看護師の仕事です。たくさんの砂は、いくつもの岩山を越えたむこうにある空き地に捨てにいかなくてはなりません。ほうきを使った看護師は体のどこかに砂が混じるので、山道を歩いているうちに次第に乾いて痩せてゆき、やがて行方不明になってしまいます。

最後の医師は真っ赤な風船です。どこが正面なのかは分かりません。表面に丸い字体で「これは赤色ではない」と赤いインクで書かれているその場所が正面なのでしょう。あるいはその反対側が正面なのかもしれません。

風船はひもで椅子の背もたれにつながれていて、患者の目の前をふわふわと漂っています。ふうせんをみつめていると目がまわり、問診が終わる頃には患者は必ず具合が悪くなってしまいます。

ベッドでしばらく休んでいる間、風船は子守歌を歌います。風船の表面のゴムはとても薄く、とても高い音まで出せるのです。そのソプラノの歌声は何オクターブも昇り続けてやがて耳では聞こえなくなります。聞こえない歌声はこんな歌を歌っています。

終わらない夜はとても暗くて
子供たちはずっと子供のままで
終わらない夜のはじまりの歌を
子供たちに聞かせてはいけませんか

子供たちは眠っています
子供たちは丸くなり
夢の中でも眠っています

夢の毛布に隠れているのは
迷子になった三日月です
そんなに蹴ってはいけません
太った足の裏側に
三日月の先が突き刺さり
甘い血液があふれます

夢の毛布に隠れているのは
闇に閉じこめられた蝶です
そんなにほおばってはいけません
ちいさな口からはみだした

蝶の模様が羽ばたいて
唇が空へ飛んでゆきます

夢の毛布に隠れているのは
夢で生まれた赤ちゃんです
そんなに抱きしめてはいけません
体が溶けてうんちがあふれ
おしっこが空を流れます

終わらない夜はとてもやさしくて
子供たちはずっと子供のままで
終わらない夜のはじまりの歌を
子供たちに聞かせてはいけませんか
終わらない夜のおわりの歌を
子供たちに聞かせてはいけないのでしょうか

こんな歌では誰も眠れないと看護師たちは陰口をたたいています。この歌のせいでこの世の終わりでは誰も眠れないのかもしれませんが。空白の病院で施される治療は、不眠症になるための治療なのだ、看護師の言葉を聞いてピアノは気がつきました。満月のせいではなかったようです。

空白の病院の受付にはステンドグラスの人形が座っています。蝶の模様が刻まれた大きな瞳で天井のあかりだけを見つめていて、診察券には触れようとしません。この子は眠ったことなどないのかもしれないと思い、ピアノはすこし安心します。

ピアノは風船の子守歌にあわせて伴奏をしたいのですが、病院は乾燥していながら湿っているので誰にもピアノを調律できません。調律師のいない空白の病院を訪れるたび、ピアノの音程はどんどんはずれてゆくのです。いずれ誰にもそれが音だと分からなくなるでしょう。

深海から来た医師の診察を待っていると、順番が来てもピアノは呼び出されず、そこにはいないカモノハシが呼ばれます。カモノハシを呼びながら看護師はピアノを手招きするので、もしかすると名前を間違えられているのかもしれませんが。

砂漠で生まれた医師の診察を待っていると、順番が来てもピアノは呼び出されず、そこにはいないフラスコが呼ばれます。フラスコを呼びながら看護師はピアノを手招きするので、名前を間違えられているのが分かります。でも、いくら訂正しても、看護師は呼び方を変えてはくれませんでした。

真っ赤な風船の医師の診察を待っていると、順番が来たとき子守歌が止むので、何も呼ばれないのにピアノは診察室に入ってゆきます。そんなときに限って真っ赤な風船の医師の正面には赤い文字で「赤色」と書かれています。ピアノはそれを見るとその意味のようなものを思い出しそうになるのですが、音でないもののことはよく覚えてはいないのです。

この世の終わりの家では、ピアノの音が音ではなくなるにつれて、ピアノは小さく縮んでゆきます。小さくなるにつれて、満月から落ちてくる光の塊のたてる音はますます大きく聞こえるようになりました。小さすぎるピアノの中にはいられないと、弦という弦が元あった場所から離れ、体をくねらせながらふわふわとピアノの周囲を漂っています。弦と弦が触れあうたびに新しいメロディが生まれます。でも調律されていない音はメロディを伝えることができないので、すぐに消えてしまうのです。

この世の終わりの家に住んでいたのはピアノでした。白い鍵盤と黒い鍵盤がすべて一つにつながってどんなメロディでも演奏できる古い形のピアノでした。ピアノは小さく縮み続けてこの世の終わりから消えてしまいました。弦は体をくねらせながら、ピアノの消えたあたりにずっと漂い続けていました。

その十三 折り紙細工

この世の終わりの家に住んでいたのは折り紙細工の鳥でした。大きく広げた翼は地平線から地平線まで届きます。この世の終わりは翼の陰になってしまうのですが、いつも夜なのでそんなに違いはありません。翼の先端は地平線のもっと先にまで続きすこしも見えませんでした。

この世の終わりの家の上空はいつも真夜中です。夜空の中心にはすこしも動かない満月がいて、いつも光の破片をこぼしています。破片は破片とぶつかって、しゃらしゃらという音をたてながら地上に落ちてきます。ぶつかるたびに小さく砕けてゆくので地面に落ちる頃にはもうみんな光の粉になっています。

夜、外にいと、この光の粉に包まれてしばらくの間輝きます。あまりにもまぶしく輝くので光に包まれているのが誰なのかすぐには分からないくらいです。こんなに明るくは道に迷うこともできません。ただ、輝き続けるとそのかわり体は冷えて凍り付きすぐに死んでしまいます。迷子になったものだけがこの世の終わりをさまよっているのです。

折り紙細工の鳥は、この世の終わりの家の屋根の上で、はやく光の粉が降ってこないかと待っています。鳥は輝きながら夜空を飛んでみたいのです。もしも輝きながら空を飛べたら死んでもかまわないと思っています。死んでも輝いていられるのならそのほうがいいのにきまっているでしょう。この世の終わりの夜空は明るいようできて、やはり暗いのですから。そんなとき、折り紙細工が死ぬことなどないことに折り紙細工の鳥は気づいていません。自分のことというものはなかなか分からないものです。

いつまでたっても折り紙細工の鳥の上に光の粉は落ちてきませんでした。光はずっと北のほうで公園を明るく輝かせています。光はずっと東のほうで砂丘の稜線を輝かせています。光はずっと西のほうで森の木の葉の葉脈をほのかにゆっくりと点滅させています。

折り紙細工の鳥は屋根の上でずっと待っていたのですが、光の粉に触れることもできないまま、海から吹き寄せる風のせいで湿って重たくなってしまいました。こんなに重い体では空に飛び立ったとたんに眠りこけてしまうでしょう。

この世の終わりの家の西側は断崖です。門を抜けると道はすぐに消えていて、ずっと下のほうに真っ黒な海があるだけです。どこまでもどこまでも続く海は静かで音ひとつありません。海を覆う波はどれもひどく硬くて、波に触れた風は切り裂かれ苦痛の叫びをあげますが、海はその声をすぐに奪い取ってしまいます。声を奪われた風は波の言うなりにこの世の終わりの家にはじきとばされ、そこから北へ東へ西へと分かれてゆくのです。

折り紙細工の鳥は、窓辺に置いた椅子の背もたれにとまり、風向きが変わるのをずっと待っています。風向きが変われば光の粉はこの家にも飛んでくるでしょう。それまでは、この家だ

けがいつまでも暗く、ここだけが本当の真夜中のようです。

この世の終わりの家の中庭にはピアノの墓がひとつあります。そのすこし上の空中を何か細長くつやつやと銀色に輝くものが、たくさん漂っています。追い払っても追い払っても離れようとはしないのです。細長くて銀色のそれはお互いに触れあうたびにガラスの鈴の音をたてます。その音はすぐさまガラスの破片に変わりピアノの墓にふりそそぎます。ガラスの鈴がガラスの破片に変わるとき生まれるメロディは午後になると中庭にあふれ、いまにもピアノが生き返ってきそうです。細長くてつやつやと銀色に輝くものは、きっと墓の中に眠っているピアノの弦だったのでしょ

う。ピアノの弦は空中の虫を捕らえては食べていて、食べるたびにすこしずつ太くなってゆきます。太くなくても重くはならないのか、あいかわらずピアノの墓の上の空中を漂い続けていました。

もしかするとピアノの弦のように思えたものは、本当は細長い風船だったのかもしれない。黄色と水色で横縞に塗り分けられ、ねじられて結びつけられてキリンや蝶や犬の形になっては、やがてしぼんでしまうからです。そんなことをするのはきっとピアノを笑わせたなのでしょう。ただ、いろいろな形になってみせても、お墓に何の変化も起きないことに気がつく

つくと、そのたびに風船は少しだけ縮んでしまいます。大きくなったり縮んだりを繰り返しながら、風船だったりピアノの弦だったりする細長いものは、すこしずつ大きくなってゆきました。すこしずつ大きくなってやがて中庭よりも大きくなると、風船だったりピアノの弦だったりするものは、庭の塀を倒して夜空に昇ってゆきます。それでもこの世の終わりの家から遠くに離れないのはそれほどピアノに思い出があったのでしょうか。

実は、風船や弦だったりする細長いものは、ピアノの墓と頑丈な糸でつながっていたのです。ほどこうとして糸に触れると、思いのほか糸は鋭くて、折り紙細工の鳥の紙でできた翼は両方とも肩の付け根から切断されてしまいます。地平線の彼方まで広げられていた羽根は地面に落ちてしまえばただの紙屑です。そのかわりピアノの墓から延びていた糸も切れてしまい、ピアノの弦や風船だったりする細長いものは、もうピアノのお墓のそばには留まったりしません。地面に落ちた紙屑を餌にしながら光の粉で輝いている場所へと飛んでゆきました。

風はいつまでも海から吹き続けているから、光の粉がこの世の終わりの家に降り注ぐことはきつとないのでしょう。たとえ光の粉に包まれても、羽根がないのではもう空を飛ぶこともできない折り紙細工の鳥は、ピアノの墓の横に椅子をおいて背もたれの上にとまり、いなくなった弦のかわりにピアノが生き返るのを待っています。

夜は永遠に続き、折り紙細工はその間ずっと眠ることはありませんでした。

その十四 人形

この世の終わりの家に住んでいたのは犬の姿の人形でした。スタンドグラスで作られていて目にはあげは蝶の模様が描かれています。

この世の終わりの家の窓の外はいつも真夜中です。真夜中の空の中心では満月がじっと動かずにいて、その丸い縁から光のかけらをこぼしています。あとからあとからあふれてくる光のかけらは途切れることがなく、本当にこれのすべてが光なのかと、満月はときどき息をふきかけてそれが本物の光なのか確かめるのです。

この世の終わりの家の窓に当たると、光のかけらはとりわけ強く輝いてから消えます。とりわけ強く輝いた瞬間の光が窓際にいた犬の姿をした人形当たると人形は動きだし、家の中のおいを確かめるために歩きまわります。それから家の外にでて、中庭やもっと遠くの公園まで散歩にでかけたりもします。

犬が公園でおしっこをまき散らしながら散歩しているとき、真っ黒な夜空では空の半分ほどもある大きなあげは蝶が、黄色と青色と黒の模様の羽根を広げて、ゆっくりと飛行しています。羽根を少しも動かさず、満月のまわりをまわり続けています。闇の中では蝶の行く手を遮るものなど何もないのです。

噴水の水に濡れて光がやがて消えてしまうと、歩き回っていた犬はいなくなり、夜空のあげは蝶もなくなり、ただ犬の姿をした人形が前と同じ姿でこの世の終わりの家の窓辺に座っているのです。スタンドグラスが屈折させた光の具合で、人形は動いているように見えただけなのかもしれません。

この世の終わりの家にいたのは、犬ではなくてクマの姿の人形でした。ステンドグラスで作られていて目にはあげは蝶の模様が入っています。

夜空の中心で満月は、いつものことですが、光のかけらを落としていました。光のかけらは砂漠に落ちて、砂の結晶にもぐりこみます。そして、ときどき起こる砂漠の嵐に吹きあげられ、砂粒が夜空の高くにたどり着くと、光のかけらは結晶の中からはじきとばされ、この世の終わりの家にまでたどりつくのです。

とばされてきた光のかけらは、この世の終わりの家の入り口にある郵便受けに飛び込んでしまいます。郵便受けの受け口が光のかけらと同じ形になっているので、光のかけらしか入れないのです。

たくさんの光のかけらが飛び込んで、やがて郵便受けからあふれだし、この世の終わりの家の中が光でいっぱいになると、クマの姿をした人形はその光を浴びて歩きだし、家の中でおいしい蜂の巣を探します。それから家の外にでて、中庭やもっと遠くの森まで探しにでかけたりもします。

クマが森の中でよだれをまき散らしながら蜂の巣をさがしているとき、真っ黒な夜空では空の半分ほどもある大きなあげは蝶が、黄色と青色と黒の模様の羽根を広げて、ゆっくりと飛行しています。羽根を少しも動かさず、満月のまわりをまわり続けています。闇の中では蝶の行く手を遮るものなど何もないのです。

森の木の葉がクマの体をなでまわし光を払い落としてしまうと、探し回っていたクマはいなくなり、夜空のあげは蝶もいなくなり、ただクマの姿をした人形が前と同じ姿でこの世の終わりの家の窓辺に座っているのです。ステンドグラスが屈折させた光の具合で、人形は動いているように見えただけなのかもしれません。

この世の終わりの家にいたのはクマではなく、深海に棲むさかなの姿をした人形でした。ステンドグラスで作られていてうろこの一枚一枚にあげは蝶の模様が入っています。深海に棲む魚の目は何も見えないのです。

窓の外に見える夜空にはいつも満月が浮かんでいて、なげやりに光のかけらを放りだしています。光のかけらは重力のことに気づく前に森の木の葉につかまって、裸の枝に縛り付けられてしまいます。しばらくして、裸の枝は光のかけらで暖まると銀色の光を放ち始め、その光が森を銀色に輝かせます。森の輝きは、葉の裏に隠れていた鳥の羽根をやはり銀色に染めてしまうので、空を飛ぶ鳥はみんな銀色に見えるのです。風に逆らって飛ぶ鳥はこの世の終わりの家の屋根の上にたどり着き、体をぶるっとふるわせて、銀色の光を屋根の上に払い落とします。

深海に棲むさかなの姿をした人形は、屋根からこぼれてくる光のしずくをうろこに受けると空中に浮かび体をくねらせて泳ぎ始めます。深海に棲むものの考えることはよくわかりません。

さかなの姿をした人形は家の中を泳ぎ、深海によく似た場所を探しますが、この世の終わりの家の中に深海に似た場所などひとつもありません。さかなが深海を探しながら空中を泳いでいるとき、真っ黒な夜空では空の半分ほどもある大きなあげは蝶が、黄色と青色と黒の模様の羽根を広げて、ゆっくりと飛行しています。羽根を少しも動かさず、満月のまわりをまわり続けています。闇の中では蝶の行く手を遮るものなど何もないのです。

鳥が風の向こうに飛び去り、やがて銀色の光が尽きてしまうと、泳いでいたさかなの姿はなくなり、夜空のあげは蝶もなくなり、ただ深海に棲むさかなの姿をした人形が前と同じようにこの世の終わりの家の窓辺に横たわっているのです。ステンドグラスが屈折させた光の具合で、人形は動いているように見えただけなのかもしれません。

この世の終わりの家 15

この世の終わりの家の裏庭には、ピアノの墓がありました。ずいぶん古い墓なのですが、墓の上の空中にはいつも細長くて銀色をした虫のようなものが漂っています。

その虫のようなものは空中でお互いに触れあうたびに、奇妙な音をたてます。その音が気に入らないのか裏庭には、深海のさかなの姿をした人形は決して近づきませんでした。

奇妙な音はピアノの音とは似ても似つかない音で、なにかのメロディを見つけることも難しいのですが、聞いているとどこかピアノ練習曲を思い出させる音なのです。

そんなにピアノ練習曲に似た音をたてるのは、その虫のようなものが本当はピアノの弦だからなのでしょう。墓の中にいるピアノの弦だったものが、ピアノから離れられずにいるのかもしれない。

奇妙な音は繰り返されるにつれて、空中に集まりやがて飽和し結晶となってピアノの墓の上に落ちてゆきます。どんどん積もって結晶は、ピアノの墓が見えなくなるほどになり、やがて裏庭は音の結晶であふれ、それから裏庭の塀を倒して外にまで流れ出ていったのです。

裏庭の塀がなくなると、ピアノの弦たちは光のある方へと飛んでゆきました。西の砂漠ではうねりながら輝く砂嵐がはやくおいでと呼んでいます。東の森では木の枝という枝が銀色に輝いてここにおいでと囁いています。北のなにもない場所のむこうにある公園のブランコは、ピアノの弦の仲間のように銀色に輝き、ここがいいよここが最高だよと仲間を誘っているのです。

それぞれの呼び声に誘われて、ピアノの弦は思い思いの方向に、飛んでいってしまいました。ピアノの墓の上空にいたのには特別な理由などなかったようです。

最後まで残っていたのは、一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦でした。音のことしか考えたこともなく、あまりにも甲高い音だったので、光のことが分からなかったのです。

それでも他の弦がひとつもいなくなると、一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦も、どこかにいなくなっちゃいけないと思うようになり、この世の終わりの家の南の門から外に出たのです。

南の門を抜けると道はすぐに崩れ落ちていて、その先には地面がありません。その先にもまだこの世の終わりが存在するのか、それさえ確かなことには思えないのです。この世の終わりの家の南側は海です。この世の終わりはすべて海の中にあるとでもいうように、どこまでも海が広がっていました。

ピアノの弦は海のさざ波が反射する満月の光の間を、漂ってゆきました。海のさざ波の間からはどこか懐かしい歌声が聞こえてきます。その歌声をたよりに、一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦は、南のほうへと漂ってゆきました。

どこまでもどこまでも続く海の上で、かすかな向かい風がピアノの弦を先へ先へとひっぱっ

てくれました。どれだけ南に進んだのでしょうか、やがて水平線を越えるときピアノの弦が一つ音を立てます。ピアノの弦がこれまで出したことのあるどの音程とも違った重い音でした。ピアノの弦は他の弦がいるのかと思いましたが、こんな遠くの海の上にピアノの弦など他にはいません。その音は自分の音だったのです。

水平線を越えると、向かい風はなくなっていました。追い風ありません。しばらくは水平線のあたりに漂っていたピアノの弦ですが、さざ波の間から聞こえる懐かしい歌声は、はやくおいでと呼んでいます。ピアノの弦はその歌声をたよりに、自分の体をくねらせて、また先へ先へと進んでいきました。

水平線を越えるたびにピアノの弦はひとつ音をたてます。その音がいくつ生まれたのか、水平線をいくつ越えたのか、ピアノの弦はもう覚えてはいませんでした。でも、そのたびに、音は重くなっていて、ピアノの弦はどんどん海面の近くにさがっていったのです。

ずいぶん下に降りてくると、さざ波は空中に手を伸ばしピアノの弦をつかまえようとしめます。さざ波が近づくと、ピアノの弦はおびえて逃げるのですが、ずいぶん太くなったピアノの弦は疲れていて、だんだんつかまりそうになります。そして、とうとうさざ波の間の歌声の聞こえるあたりに、落ちてしまったのです。

海の中ではピアノの弦は身動きもできず、ずっと底のほうへと沈んでゆくだけです。一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦はまっすぐ海底に沈んでゆきました。海底にたどりつくと、ピアノの弦はやわらかい砂の上に横たわります。

そして耳をすませると、海底は静かだけれど、そこでは世界中の音が聞こえています。冷たいけれど暖かい水はピアノの弦をやさしくくすぐります。なにかもから遠くに来て、ピアノの弦は新しい練習曲を作りたいなと思うのですが、ひとりではどんな曲も作れません。

ピアノの弦はただ世界中の音を聞きながら、海底の砂に抱かれて眠っていました。世界中の音が、ピアノの弦のまわりに集まって、固まって、銀色のうろこのようになりました。うろこの上にまたうろこが重なり、やがて銀色のうろこのかたまりが、深海の海底に生まれしました。ピアノの弦は銀色のうろこのどこにあるのかもわかりません。世界の音はもうピアノの弦には聞こえていないでしょう。

一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦は光を知りませんでした。

一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦は深海の底で音を忘れてしまいました。
こんなふうにして最初の深海に棲むさかなは生まれたのです。

その十五 ピアノの墓

この世の終わりの家の裏庭には、ピアノの墓がありました。ずいぶん古い墓なのですが、墓の上の空中にはいつも細長くて銀色をした虫のようなものが漂っています。

その虫のようなものは空中でお互いに触れあうたびに、奇妙な音をたてます。その音が気に入らないのか裏庭には、深海のさかなの姿をした人形は決して近づきませんでした。

奇妙な音はピアノの音とは似ても似つかない音で、なにかのメロディを見つけることも難しいのですが、聞いているとどこかピアノ練習曲を思い出させる音なのです。

そんなにピアノ練習曲に似た音をたてるのは、その虫のようなものが本当はピアノの弦だからなのでしょう。墓の中にあるピアノの弦だったものが、ピアノから離れられずにいるのかもしれない。

奇妙な音は繰り返されるにつれて、空中に集まりやがて飽和し結晶となってピアノの墓の上に落ちてゆきます。どんどん積もって結晶は、ピアノの墓が見えなくなるほどになり、やがて裏庭は音の結晶であふれ、それから裏庭の塀を倒して外にまで流れ出ていったのです。

裏庭の塀がなくなると、ピアノの弦たちは光のある方へと飛んでゆきました。西の砂漠ではうねりながら輝く砂嵐がはやくおいでと呼んでいます。東の森では木の枝という枝が銀色に輝いてここにおいでと囁いています。北のなにもない場所のむこうにある公園のブランコは、ピアノの弦の仲間のように銀色に輝き、ここがいいよここが最高だよと仲間を誘っているのです。

それぞれの呼び声に誘われて、ピアノの弦は思い思いの方向に、飛んでいってしまいました。ピアノの墓の上空にいたのには特別な理由などなかったようです。

最後まで残っていたのは、一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦でした。音のことしか考えたこともなく、あまりにも甲高い音だったので、光のことが分からなかったのです。

それでも他の弦がひとつもいなくなると、一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦も、どこかにいなくなっちゃいけないと思うようになり、この世の終わりの家の南の門から外に出たのです。

南の門を抜けると道はすぐに崩れ落ちていて、その先には地面がありません。その先にもまだこの世の終わりが存在するのか、それさえ確かなことには思えないのです。この世の終わりの家の南側は海です。この世の終わりはすべて海の中にあるとでもいうように、どこまでも海が広がっていました。

ピアノの弦は海のさざ波が反射する満月の光の間を、漂ってゆきました。海のさざ波の間からはどこか懐かしい歌声が聞こえてきます。その歌声をたよりに、一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦は、南のほうへと漂ってゆきました。

どこまでもどこまでも続く海の上で、かすかな向かい風がピアノの弦を先へ先へとひっぱってくれました。どれだけ南に進んだのでしょうか、やがて水平線を越えるときピアノの弦が一つ音を立てます。ピアノの弦がこれまで出したことのあるどの音程とも違った重い音でした。ピアノの弦は他の弦がいるのかと思いましたが、こんな遠くの海の上にピアノの弦など他にはいません。その音は自分の音だったのです。

水平線を越えると、向かい風はなくなってしまいました。追い風もありません。しばらくは水平線のあたりに漂っていたピアノの弦ですが、さざ波の間から聞こえる懐かしい歌声は、はやくおいでと呼んでいます。ピアノの弦はその歌声をたよりに、自分の体をくねらせて、また先へ先へと進んでいきました。

水平線を越えるたびにピアノの弦はひとつ音をたてます。その音がいくつ生まれたのか、水平線をいくつ越えたのか、ピアノの弦はもう覚えてはいませんでした。でも、そのたびに、音は重くなっていて、ピアノの弦はどんどん海面の近くにさがっていったのです。

ずいぶん下に降りてくると、さざ波は空中に手を伸ばしピアノの弦をつかまえようとしめます。さざ波が近づくと、ピアノの弦はおびえて逃げるのですが、ずいぶん太くなったピアノの弦は疲れていて、だんだんつかまりそうになります。そして、とうとうさざ波の間の歌声の聞こえるあたりに、落ちてしまったのです。

海の中ではピアノの弦は身動きもできず、ずっと底のほうへと沈んでゆくだけです。一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦はまっすぐ海底に沈んでゆきました。海底にたどりつくと、ピアノの弦はやわらかい砂の上に横たわります。

そして耳をすませてみると、海底は静かだけれど、そこでは世界中の音が聞こえています。冷たいけれど暖かい水はピアノの弦をやさしくくすぐります。なにもかもから遠くに来て、ピアノの弦は新しい練習曲を作りたいなと思うのですが、ひとりではどんな曲も作れません。

ピアノの弦はただ世界中の音を聞きながら、海底の砂に抱かれて眠っていました。世界中の音が、ピアノの弦のまわりに集まって、固まって、銀色のうろこようになりました。うろこの上にまたうろこが重なり、やがて銀色のうろこのかたまりが、深海の海底に生まれました。ピアノの弦は銀色のうろこのどこにあるのかもわかりません。世界の音はもうピアノの弦には聞こえていないでしょう。

一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦は光を知りませんでした。

一番細くて一番高い音を出していたピアノの弦は深海の底で音を忘れてしまいました。

こんなふうにして最初の深海に棲むさかなは生まれたのです。

その十六 スーツケース

この世の終わりに住んでいたのはスーツケースでした。あざやかなピンク色をしていましたが、見かけとは裏腹にとっても頑丈で、どんなことがあっても中にしまったものが壊れることはありません。

この世の終わりの家の窓から見えるのはいつも真夜中です。真夜中の空は物音もせずひんやりとして、ただ満月だけがその中心で眠っています。月の寝息は光のかたまりになり、すこしでも月から離れると、闇にまぎれて飛ぶみみずくの爪に捕らえられ森のどこかに隠されてしまいます。

この世の終わりの家の窓辺には荷造りの終わったスーツケースがいて、窓の外の夜のどこかで出発のベルが鳴るのを待っています。砂漠にも公園にもまして海の中にも駅などあるはずはなく、あの森の奥で何枚も重なった大きな木の葉の向こう側に駅の入り口は隠れているでしょう。出発のベルはこの世の終わりの家にたどり着く前に、みみずくの頑丈な爪につか

まれて、森から外に逃れることはできないはずです。

荷造りはずっと昔に終わっていたので、出発を待つスーツケースは、自分の中に何が入っているのか、すこしも知りませんでした。

それは満月の寝息から生まれた光のかたまりではないでしょうか。どういういきさつでスーツケースの中にしまわれたのかはわかりませんが、満月の光のような気がしてなりません。何も中にいないかのように軽いのは光だからではないでしょうか。内側に張られた布から乾いたにおいがするのは、光を浴び続けているからではないでしょうか。

スーツケースには確かめることはできませんが、満月の光だという確信がありました。

あるいはそれは、この世の終わりの地図なのかもしれません。どういういきさつでスーツケースの中にしまわれたのかはわかりませんが、この世の終わりの地図のような気がしてなりません。丸められた地図は無造作にスーツケースの中に放り込まれているのでしょう。地図と地図とが触れあう乾いた音が、内側からときどき聞こえてくるのです。地図に描かれた川の流れる音や、山の崩れる音もします。どれだけたくさんの地図がしまわれているのか、スーツケースには確かめることはできませんが、この世の終わりの地図だという確信がありました。

あるいはそれは、地下室にたくさん隠されていたあのたまごなのかもしれません。大きくて今にも孵化しそうなほど殻の薄くなったたまごは、スーツケースの暗闇の中で生まれたいともがいているのに違いありません。ときどき内側からスーツケースを揺らすのは、割れかけた殻をもとにもどそうとしてたまごが身じろぎしているのです。揺れるたび倒れそうになるほどスーツケースが重いのも、たまごが大きく育ったからです。スーツケースには確かめることはできませんが、地下室にいたたまごだという確信がありました。

あるいはそれは、森に棲んでいるみみずくなのかもしれません。森のどこを探してもみつけれないみみずくは、本当はこのスーツケースの中に隠れていたのです。みみずくのさらってきた獲物が腐り、内側からいやなおもしています。はばたきの音がすると、スーツケースの蓋がほんのすこし開けられて、そこからみみずくが出入りしているような気もします。

この世の終わりに住んでいたのはスーツケースでした。荷造りはすっかりできていました

が、出発のベルはいつまでも鳴りませんでした。